

認めなかったものは15例であった。そのおのおのについて各検査項目の値を比較したのが成績Iである。腎臓設置時には尿量、尿浸透圧、クレアチニンクリアランスの値は感染有群と感染無群とでは差を認めないが、Naクリアランス、Clクリアランス、Kクリアランスの値は感染有群に比べ感染無群の方に正常値をとる率が高いことがわかる。

また腎臓設置期間中のおのおのの値の推移をみたのが成績IIである。Naクリアランス、Clクリアランス、Kク

リアランス、クレアチニンクリアランスは感染を有する群に比べて感染のない群の方が通過障害の解除に伴ない、正常な値となる率が高い。ただ尿浸透圧はこの期間だけでみると感染のない群でも正常値以下を示す例が多いが、これは水腎症自身に尿浸透圧の低値を示すものが多く、少なくともこの期間内での上昇は認められなかった。

これらのことにより水腎症については通過障害を取り除くことが当然であるが、感染群についてはより早期に施行されることが望ましいと思われる。

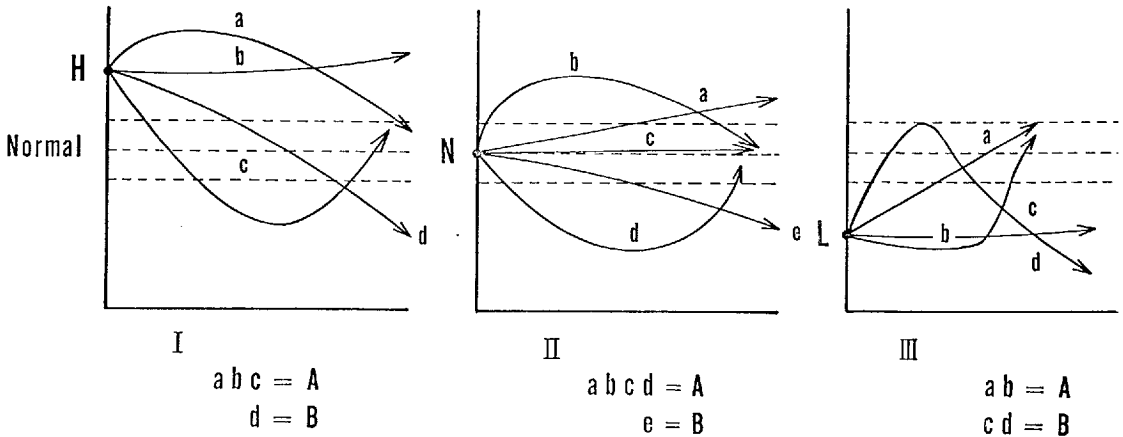


図1 Pattern 分類 感染(+)群, (-)群

## 小児尿路感染症の研究

千葉大学泌尿器科	片山	喬
	安田	耕作
	岩間	汪美
同 中央検査部	小林	章男
同 小児科学	新美	仁男

### 1. 千葉市学童集検により発見された無症候性細菌尿症例の検討

昭和52年度に千葉市内の小学生に対して行われた3次にわたる尿細菌検査の結果、77,950名中68名(0.09%)が有意義な細菌尿を有すると判定された。これら症例の尿蛋白陽性者は6例、尿沈渣では400倍視野で白血球1~5個22名、6~9個7名、10個以上39名であり、分離菌種は大腸菌60、クレブシエラ7、エンテロバクター1

という結果であった。既往歴では腎盂腎炎5、膀胱炎11、熱を出しやすい26、遺尿38であった。この68例中13例に泌尿器科的検索をおこない、6例にVUR、3例に神経因性膀胱(うち1例はVUR合併)を認めたが、他の5例には泌尿器科的異常を認め得なかった。この時発見されたVURの程度は進行したものが多く、集検の有用性を示すものと思われる。

## 2. 小児尿路感染症の予後調査

昭和50年1月より52年12月までの3年間に千葉大学泌尿器科外来を訪れた小児患者は1,327例であるが、うち215例が尿路感染症と診断されている。この内訳は表1に示すとおりである。昭和53年7～8月にこれら患者の予後調査を行ったところ、調査不能77例をのぞく138例中、治癒の状態にあるもの113例(81.9%)、未治癒25例(18.1%)という結果で、この未治癒25例の内訳は表2に示すとおりであった。すなわち最低8ヶ月の follow up で未治癒の尿路感染を示すものは大部分が明らかな尿路障害を有するものと思われる。

## 3. 学童集検により発見されたものと千葉大病院外来症例の比較

千葉大外来症例で明らかな尿路感染症を有し、千葉市在住の学童が17例あったが、これらは学童集検の第3次陽性者に入っておらず、尿集検で3回陽性を指標とする方法では明らかな尿路感染を有するものを見逃す可能性のあることを指摘したい。

## 4. 恥骨上穿刺採尿法について

主として成人男女12例について膀胱穿刺尿、カテーテル尿、中間尿を採取し、その尿中白血球数、細菌数を比較検討した。この3者が一致するものも多いが、特に女

性においては中間尿で外陰部からの汚染がおこる可能性を指摘した。

表1 小児尿路感染症の内訳

膀胱炎	82例
腎盂腎炎	22
V U R	24
神経因性膀胱	14
亀頭包皮炎(外陰炎)	19
尿路結石症	14
血尿	8
外傷	3
無症候性細菌尿	10
その他	19
計	215

表2 未治癒25例の内訳

V U R	7例
神経因性膀胱	6
腎盂腎炎	2
腎結石	2
無症候性細菌尿	2
膀胱炎	2
血尿	2
水腎	1
夜尿	1
計	25

# 小児尿路感染症の臨床的研究

神戸大学小児科 松 尾 保  
池 内 春 樹  
山 名 克 典  
山 田 至 康  
飯 田 泰 子

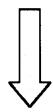
## I. 新生児期の尿路感染症について

### ①正常新生児における尿中細胞数

新生児期の尿路感染症についての報告は極めて少ない。これは新生児期における採尿の困難さもその一因と考えられる。われわれは当院産科で出生した在胎40週、生下時体重 2,700～3,300 g の正常新生児から得られた39検体の尿について直接法(フックス法)及び遠心沈澱法に

より尿中細胞成分の検討を行った(表1)。

男児14検体では、赤血球数は直接法で2～65 平均12.3、遠沈法で0～4/F 平均0.5/F、白血球数は直接法で3～92 平均44.6、遠沈法で0～7/F 平均2.2/Fであった。女児25検体では、赤血球数は直接法で1～80 平均19.1、遠沈法で0～6/F 平均1.9/F、白血球数は直接法で2～107 平均36.2、遠沈法で0～15/F 平均2.0/Fであった。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 1. 千葉県学童集検により発見された無症候性細菌尿症例の検討

昭和 52 年度に千葉市内の小学生に対して行われた 3 次にわたる尿細菌検査の結果, 77, 950 名中 68 名(0.09%)が有意義な細菌尿を有すると判定された。これら症例の尿蛋白陽性者は 6 例, 尿沈渣では 400 倍視野で白血球 1 ~ 5 個 22 名, 6 ~ 9 個 7 名, 10 個以上 39 名であり, 分離菌種は大腸菌 60, クレブシエラ 7, エンテロバクター 1 という結果であった。